

Eureka XI

六年制通信 No.20 令和5年10月6日(金)号

穏やかな心を養う

最近新聞で読んだのですが、市役所などの行政機関への暴言暴力がこの5年で5倍に増えているそうです。物を壊したり、机を叩いたりする。庁舎に居座り続ける。大声を出したり高圧的な態度で職員を威圧する。胸ぐらをつかむなど身体への攻撃を加える。宝塚市役所は何と放火されていましたね。昔から態度の悪い人、言葉づかいの貧困な人、すぐにカッとする人はいました。「キレル」という言葉は、私が子どもの頃はなかったのですが、いつごろからでしょうか、老若男女があちこちでキレルようになったのは。そう言えば、クレマーという言葉もいつごろから使われ出したのでしょうかね。ともあれ、あちこちにクレマーなる人々が溢れているようです。こういう人々は特に、と言いますか、決まって相手が反撃してこない場合に限って居丈高に振舞うわけですね。いつでしたか、衣料品を売る店でタオルを買ったら穴が開いていたとして、店長と接客した店員に土下座を強要した事件がありました。強要した女性は子ども連れだったそうで、子どもの目の前でよくそんなことができるものよと呆れますが、結局その女性は強要罪かなんかで捕まったらしいですね。しかし、母親が捕まるシーンを子どもが見たわけでしょうか。だとしたら全く暗澹たる気持ちになります。

これも何かで読んだのですが、クレマーとそれに対応する側の事例として、面白いと言っては何ですが、なるほどという記事を読みました。最近のクレマーは、例えば、食べ放題のビュッフェに行ったとして、わざわざ嫌いなものを皿に取り「こんなまぜいものを置きやがって、謝れ！」と言っているような程度の低さを感じる。さらに言われた側も、どんどん品数を減らしていき、ご飯とパンだけを置くような実につまらないビュッフェにして、これで文句はないでしょと開き直っているような感じがする。こんな話だったように記憶しています。なるほど。言う方も言う方なら対応する方も対応する方ですね。これ、私の邪推かもしれませんが、対応する方の本音は「うるさいなあ。嫌いならと取らんだらええやないか。こんなの完全に言いがかりでしょうが」ですよね、きっと。でもそれが言えない。だから匿名の世界で毒を吐く。しかも本音を何倍にもした毒を。何でもそんな人が増えているようなのですが、だとすると実につまらない世の中ですね。身勝手な人々の悪意に囲まれて、その悪意に毅然とした対応をとることもなく、あるいは取れないような「空気」に負けて、何となく気づまりな、生きづらい環境を私たちは私たち自身の手でいつの間に作ってしまったのでしょうか。

若い君たちは世に蔓延る愚かな大人の真似をせず、もっと穏やかな心を養いたいものですね。ちょっとしたことで過剰反応する大人が多くなりました。毎日のようにそ

ういう大人のニュースに触れていると知らぬ間に影響を受けかねません。気をつけて下さいね。君たちは勉強して本を読んで、喜怒哀楽をたくさんの語彙と比喻で表すことができ、ユーモアを解し、好き嫌いを越えて人と協力することができる大人にならなければなりません。豊かな語彙を持ち豊富な比喻表現を使えば、人の精神は穏やかになります。そしてユーモアを解す能力があれば、腹の立つことがあっても一旦そこから離れて客観的に自分を見、笑っていることができます。イライラして、頭にくることがあれば（あると思うけど）、深呼吸して客観的に状況を見るようにしましょう。

さて、ユーモアと言えば、時々例に出している「イングランドでは馬が食べるオート麦をスコットランドでは人間が食っている」というのを覚えていますか。イギリスの中でもイングランドとスコットランドは仲が悪いのですね。イングランドは競馬が盛んで、優秀な馬がたくさんいるというのが基礎知識ね。ある時イングランド出身の議員が議会で「イングランドでは馬が…」とやったわけ。喧嘩を売ったわけ。日本なら大変な問題になったでしょう。しかしスコットランド出身の議員がすかさず「その通りです。だからこそイングランドの馬とスコットランドの人間が優秀なのです」とやり返し、議場は笑いに包まれて何事も起こらなかった。いやあ、大人の対応ですね。こういうのが今の日本に最も望まれるエピソードではないかな。

実はこのエピソード、英国初の英語辞典の *oats* の項目にあるのです。A grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people. (穀物の一種で、イングランドにおいては普通馬に与えるものだが、スコットランドでは(土地の)人を養うものである)。すごいでしょ、この定義。最近見つけて嬉しかったので紹介します。

今週のおすすめ

・歌野晶午 『ハッピーエンドにさよならを』 (角川文庫)

11のバッドエンドな物語。歌野さんの本では『葉桜の季節に君を想うということ』が有名ですね。大どんでん返しと見事な伏線ということですが、しかし、あのオチは私には「ないわ」でしたね。さて、今回の短編はどれもこれも面白かった。「尊厳、死」なんて最後の一行まで騙されましたわ。そうか、確かにあり得る、とも思ったけど。作家のミスリードというのは、マジシャンのそれと双璧ですな。うまいものです。

ハッピーエンドになるように物語を紡ぐ、それさえ放棄すればもっと小説の可能性は広がる、そういう実験のような、そしてその実験は成功したよというような短篇集です。もちろんエンディングがどうしようもなく不快であったり、救いがなかったり(湊かなえの『告白』のような)すると、読む気がしないからそのあたりの塩梅が難しいでしょうね。「防疫」、これなど読み終わってから改めてタイトルを見ると、怖いようなうまいような、答えはここに書いてあったかと思わせる話です。娘のお受験に必死になる母親の狂気が描かれているのですが、ありそうで怖い。最終は受験に落ちて落ちて、もういいわ、諦めたとなるのですが、直後に母親は事故(?)で亡くなります。さて、受験させられまくった娘は成長してどうなったか。読んでみたくないですか？

BGMは Martika の *Toy Soldiers* でした…。